二月七日（月）オンラインによる月曜朝礼を行いました。

先週の二月三日は節分。四日は立春。もうカレンダーの上では、春ですね。三日の日、豆まきをした人はいますか。そもそもなんで、「豆」をまくのでしょうか。今日はそのことについてお話しします。

その昔、京都の鞍馬という所の奥に、人々を苦しめる鬼がいたのだそうです。毘沙門天（仏教の神様）が七人の賢者を呼び、三石三斗（500キログラム以上）の大豆で、鬼の目を打て。そうすれば鬼を退治できると教えてくれたので、おかげで無事に鬼を退治できたという話が伝わっています。

なんで大豆＝豆なのか。君たちの中には、「先生、ドングリの方がとがっていて、武器になります。」とか、「それを言うなら、栗の方が大きくていい。」とか、「栗よりもイガの方が強烈。」なんて考える人がいるかもしれません。

「鬼」という「魔物」の「目」を打つので、「魔目＝まめ」がピッタリ。あるいは、豆が「魔滅」に通じるからということで、豆をまいたようです。

ところで、「大豆」は、「枝豆」と同じ物というより、「枝豆」がカラカラに乾燥した物が「大豆」だと知っていますね。つまり、枝豆のミイラが大豆ということになります。

大豆からは何が作られるのかも、もう知っていますね。まずは形から想像できる物、そう、「納豆」。形は変わっている物で、白くて四角い、そう、「豆腐」。五年生が家庭科で作る「みそ」も大豆が原料。「みそ」と言えば「しょうゆ」。これも大豆が原料ですね。案外気がつかないのが、お正月、お餅につけて食べた人がいるかもしれない「きな粉」。それに、韓国料理で出る豆のついた「もやし」も大豆から作ります。大豆を土に埋めず、日にも当てず、水だけで育てると、大豆から芽が出て「もやし」になります。

「節分」では、ただの「大豆」ではなく、煎った大豆をまきます。これも言い伝えがあります。新潟県の佐渡島で、暴れまわる鬼と神様が「かけ」をして、夜のうちに島の山に百段の石段を作れたら、鬼の勝ちとするという条件を出します。夜も更けて、間もなく夜明けに近づいたころ、何と鬼は九十九段の階段を作っていたとか。神様は一計を案じ、ニワトリの鳴き声のまねをします。それにつられて辺りのニワトリが一斉に鳴きだし、鬼は朝になったと思い、降参。

あまりの悔しさに、「豆の芽が出るころ、また来るぞ！」と捨てぜりふを残して去ります。それを聞いた神様が、芽が出ぬようにと、人々に豆を煎るように命じたところから、煎った大豆をまくようになったということです。

昔の人たちは、目に見えないウイルスからうつる病気や、訳の分からないことが起こると、鬼の仕業と考えたようですが、案外馬鹿にできない知恵です。人間の脳は、目に見えない物を怖がることが苦手なのだそうです。見えない物を見える化、つまり、「鬼」のような形のある物に置き換える。見える物だと、それを遠ざけることで安心ができる。つまり自分が安心するために、「目に見える悪者」を探すという癖があるようなのです。

ですから、本当に悪いのは、目に見えないウイルスなのですが、目に見える「病気にかかった人」を攻撃して安心するような癖が、脳にはあるのです。脳のおかしな癖を跳ね返し、病気になった人がどれほど苦しんでいるのか、どんなに辛い思いをしているのか、思いをはせられるのが正しい立教生です。「人の痛みに敏感に共感できる人を生み育てる。」ということが、立教学院の目標であることを、ここで確認しましょう。

自分自身や家族の感染予防に力を尽くし、十一日からの三連休、くれぐれも体調管理に気をつけて過ごしてください。

（立教小学校校長　田代　正行）